

Title	2016年度藝文学会シンポジウム「戦争と文学」：質疑応答
Sub Title	Discussion
Author	
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2017
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.112, (2017. 6) ,p.90 (157)- 95 (152)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2016年度藝文学会シンポジウム「戦争と文学」 開催日: 2016年12月16日 (金) 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01120001-0090">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01120001-0090</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 質疑応答

司会：それでは、これから質疑応答に移りますが、その前に、ただいまのご発表に関連して、もう少し補足をお願いできればと思います。まず、長堀先生のご発表についてですが、ハンドアウトには野間宏と大西巨人の名前が載っています。時間の関係から、飛ばして触れられませんでしたでしたが、先日、このシンポジウムの打ち合わせをしているときに、大西巨人とは個人的に面識があり、とても思い入れの深い作家だとおっしゃっていました。ぜひ大西文学についてもお話しいただければと思います。次に、関根先生のご発表についてですが、石川達三、原民喜、峠三吉などの名前が挙がっていましたが、この他にも戦争と文学という観点から見て、注目すべき日本人作家がいましたら、お教えてください。次に、譚先生へは質問です。譚先生はご自身が作家ですので、これまで戦争をどのように捉え、どのような角度から作品を執筆なさってきたのか、また現在はどのような作品に取り組んでいらっしゃるのか、お教えてください。では、長堀先生、お願いいたします。

長堀祐造：戦争文学というと、私個人としてすぐに思い浮かぶのは、野間宏の『真空地帯』や大西巨人の『神聖喜劇』です。この二編は作者同士が論争を展開して、場外でも話題になり、日本文学史の中でも人気がありました。『真空地帯』は軍隊を真空と捉え、閉鎖地帯であると言うんですが、大西は、日本軍も社会の一部であり、閉鎖的な真空地帯という野間の軍隊認識を「俗情との結託」と批判するのです。一方の『神聖喜劇』は少し前の戦後文学ランキングでは決まって1位でした。玄人受けする作品ですね。

私は45年前、高校時代のこと、大西さんのご長男が同い年で、同じ学校に入るはずだったんです。しかし彼は血友病という病気を理由に入学を拒否された。そこで、抗議の運動を起こすわけですが、私たち高校生も学内からこれに呼応す

るということがありました。そんな縁で、当時はまだ『神聖喜劇』は完結していませんでしたが、すでに大作家であった大西さんとお話する機会がありまして、戦後文学や文学者のことなど、高校生相手に色々話してくれました。当時の文学青年に圧倒的人気を誇った埴谷雄高はこうだったとか、左翼文学の象徴的存在だった中野重治はこうだったとか、それに吉本隆明などとの交友を直接聞いたのは今から思うと得がたいことでした。そんなわけで戦争文学という、このような二つの作品を連想します。

司会：では、関根先生、お願いいたします。

関根謙：石川達三も『生きている兵隊』で従軍僧がシャベルを持って中国人の頭をグサリとやったり、中国の女をスパイだとか言って服を裂いて殺したりする場面を書いています。ここで石川が言いたいのは、倫理性・知性を切り捨てることでしかこの戦争を遂行できないということなんです。日本はおかしい、ということなんです。一方で阿壠は倫理的に覚醒する中国人を書いているんです。中国はなぜ勝利するか？ 正義だから。正義は理性に守られている。しかし理性の発現はなんと遅いことか、と焦燥に駆られています。

現代では、多くの人が指摘するように、村上春樹が中国に注目しています。『中国行きのスローボート』や『風の歌を聴け』で中国人の話がいっぱい出てきますが、僕が一体何を問題にしているのかというと、次の村上の文章をご覧ください。「僕は東京の街を歩きながら中国のことを思う。その中国は僕のためだけの中国でしかない。中国とは仮説であり、暫定であり、あるいは中国という言葉によって切り取られた僕自身である」。こころは彼特有の比喩ですよ。彼は「友よ、友よ、中国はあまりにも遠い」と結んでいます。他のインタビューの中でも、「なぜ中国のことを思うのか」という質問に対して、村上は「日本人は中国人に悪いことをしたから」と答えている。これは一見良く見えるんだけど、よく見て欲しいのは「祖先が中国でいろんなことをしたことを僕は本を読んでわかる。わかるけど、祖先がなぜそれをしたのかは絶対に分からない。」という言葉です。彼の目から見れば、中国は異端の世界への入り口であり、中国人は身近にいる異人種、たくさんいるけれども「絶対に」分からない人種なんです。そのことを僕は非常に問題にしたい。これは文

学者としてあるまじき姿勢だと思うからです。我々が作品に取り組んでいるとき、ベンヤミンの翻訳論にある通り、厳しい「アンガージュマン」の姿勢がないとダメなんです。「参加する」と言うとき、主体は参加しないという選択もできますが、文学者に参加しなくていいという選択肢はないんです。

もう一人、フォン・シーラッハという作家を夢中になって読んでいます。彼はお父さんがナチスの高官だったと公言しています。僕が言いたいのは、2012年にナチスの隠された罪を摘発する委員会を立ち上げられ、政府に承認されたことなんです。それがシーラッハの文学の持つ力です。こういう実際に動いている人と比べると、我々は常に対象から遠いところにおいて、対象のところへ行っても行かなくてもいいことになっているのが分かります。我々は、隔離された空白に、スピヴァクがいう透明な立場にいるんです。しかし我々の中にある共通なものを自覚しない限り、そういう文学には意味がない。そういう厳しさが日本の戦争文学にはあるか、ということなんです。

司会：では、譚先生、お願いいたします。

譚璐美：「小説は真実を伝える最良の手段である」と言われます。確かに、小説は巧みな設定により真実を読者に伝えることができます。しかし「事実は小説より奇なり」という言葉もあります。私は中国の近現代史こそまさにそうであると思います。未だに謎のまま解明されていない事実が数多くあり、未公開の歴史資料がたくさんあります。歴史ノンフィクションは公文書、日記、手紙、その他あらゆる記録を駆使して、また現地取材やインタビューも交えて総合的に考えることで、小説とは異なる魅力的な作品になると私は思っています。ただし「真実」と「事実」は違います。「事実」は証拠がありますが、「真実」は証拠がありません。漠とした人間の意志そのものなのです。では「事実」とは何でしょうか？ 日記は本心を書いているのでしょうか？ 手紙はありのままに気持ちを伝えているのでしょうか？ 人間はほんとうに自分自身の気持ちを知っているのでしょうか？ 突き詰めれば、いくつも疑問が湧いてきます。それでも作家は自分が信じる「事実」を「事実」として捉え、その先にある「真実」にたどり着く努力をするより道はありません。これはノンフィクション作品を書くうえで、いつも私が葛藤する大きな問題です。

私は作家になって30年になりますが、ずっと人間に関心を持っています。歴史のなかに生きた人間を描きたいのです。落伍者だとか失敗者とされる人のなかにも、優れた人格を持ち、使命感に支えられた人がいて、人間的な魅力に富んでいます。人間は時代の大きなうねりの中で思い悩み、信念に従って奮闘し、喜怒哀楽によって行動します。ひとりひとりの行動の集大成が歴史を形作っていくわけです。その意味で「戦争の時代」に生きた人々は魅力的な題材だと、私は考えています。

今、取り組んでいるのは五年前から始めたライフワークです。シリーズの第1弾は『日中百年の群像 革命いまだ成らず』として、三年前に新潮社から上梓しました。孫文が主人公ですが、こんな場面があります。山の向こうにいる敵とバンバン撃ち合っています。しかし孫文は医者であり、人命を助けるのが使命です。敵に向かって銃を撃ちながら、ふと横を見ると味方が撃たれて血を流している。すると孫文は銃を置き、木桶を持って川まで水を汲みに行き、負傷者を治療してあげる。それからまた銃を手にして敵を撃つ。そういうときの孫文の心理がとても興味深く、本人に聞いてみたいと思いました。人間とは、矛盾した行動を平気で行えるものなのです。

今年は、『日中百年の群像』シリーズ第2弾で、「魯迅と蔣介石」を主人公に据えて、孫文以後の日本と中国の関係を描いた作品を上梓する予定です。

テーマのひとつは、魯迅と蔣介石がそれぞれ理想とする国家像とはなにか、ということです。もう一つのテーマは、本日のシンポジウムの題名でもあります「戦争と文学」です。

福澤諭吉先生は「ペンは剣よりも強し」と言われました。しかし命の危険に晒された文学者は恐怖との戦いを強いられます。長いスパンで見ればペンが強いというのは確かですが、もし目の前に銃を突き付けられたら、文学者は無力に違いありません。ペンを持つ者は勇気と使命感が求められますが、だからと言って、他人にそれを強いることはできません。「ペンと剣の戦い」は、20世紀前半の魯迅と蔣介石との戦いそのものですが、現在でも、アメリカや中国では権力者とメディアの熾烈な戦いが繰り返されています。無論、日本でもそうです。だからこそ、私は「ペンは剣よりも強い」と信じたいし、文学の持つ力を信じたいと思っています。

司会：ありがとうございます。では次に、会場の皆さまからのご意見、ご質問を承りたいと思います。

(1) アプトン・シンクレアについて。中国でも翻訳は出ていたのでしょうか？

長堀：正確なところは即答できないのですが、魯迅は日本語ができたので、日本語の翻訳で読んでいたと思います。〔その後、確認したところではシンクレア作品は当時、中国でも流行しており、多くの翻訳が出ている。中国社会科学院文学研究所 総纂『中国文学史資料全編・現代巻 中国現代文学総書目・翻訳文学巻』（賈植芳他編、知識産権出版社、2010）、北京図書館編『民国時期総書目（1919 - 1949）外国文学』（書目文献出版社 1987、北京）参照。なお、魯迅蔵書中のアプトン・シンクレア作品には、日本語版で『地獄』（前田川広一郎訳、世界社会主義文学叢書、南宋書院、1928年）と『拝金芸術』（木村生死訳、金星堂、社会芸叢書、1927年）の2点があるが、中国語版、英語版のシンクレア書は見当たらない。——初校に際して長堀記す〕

(2) 今日のシンポジウムを受けて、どう過去の作品と向き合うかについてはたくさんヒントが出たと思いますが、平和と思われている日本で、戦争とどう向き合うべきなんだろう、どうコミットできるだろう、どう戦争を拡大解釈できるだろうと思いました。

関根：戦争の文学をやっていて、加害者と被害者について考えることがあります。これが現在の平和を考える上で、解決のポイントになるかもしれないと考えています。中国での戦争の捉え方は、言うまでもなく侵略者日本対愛国者です。日本という侵略者であり、中国は被害者であるという形になります。フランスの作家デュラスは『苦悩』という作品で、「全世界が死の山を眺め、神の被造物が人に与えた死の総量を眺めるとき、この犯罪に対して与える唯一の答えは何か」と問い、圧倒的な悲惨の前で言えることは何なのか、これは誰がやったのかではなく、人類が犯した罪として深く自覚しなければならないと言います。「誰をも、いかなる民族をも告発せず、告発したのは人間である」という別の言葉もあります。システムとしての戦争が発動されている時、それに対して人間はどう

動くべきだったか、それに対して答えを出せるのは、文学ではないかと思う。中国と日本が分かり合える時というのは、被害者も加害者も純一な意味ではありえない、もっと大きな責任、そのシステムを動かしてしまった罪の責任を問うことができたときだと思います。これが日本と中国が分かり合うには重要だと考えています。

司会：質問はまだ尽きないと思いますが、時間になりましたので、シンポジウムを終了させていただきます。本日は、藝文学会シンポジウム「戦争と文学」にご来場いただき、ありがとうございました。